検証 天童中1自殺 下

真相究明 足取り重く

「このような悲しい事態が発生したこと、まだまだ指導が甘かったと、生徒に対して申し訳なかったと思う。校長としての指導力のなさをつくづく重く、責任を感じている。なぜ気付いてあげられなかったのか、悔しくて、悔しくてならない。学校一丸となって、2度とこのようなつらい事態が起こらないように、検証したい」

天童市教委の水戸部知之教育長は先月20日の市議会総務教育委員会で、自殺した女子生徒が通っていた学校の校長から託されたメッセージを読み上げた。事故の一報が入ってから、13日が過ぎていた。

市教委や学校の真相究明に向けた足取りは重かった。在校生の心のケアを優先するとして、全校生徒を対象にアンケートを実施したのは、事故から8日後の15日だった。しかも、校長は同日の記者会見で、まだアンケを行う前にもかかわらず、「いじめはないと思っている」と発言。「いじめの調査でのアンケではない」とも述べた。

この発言について、文部科学省児童生徒課は「教員が把握していないというだけで言ったとすれば、児童生徒の目線で指導する姿勢が見えない対応だ」と疑問視する。事実、校長は教職員から聞き取った話だけを基に発言していたが、一方で、事故から会見までの間に3回、女子生徒の父親からいじめの存在を訴えられていた。

アンケを行うタイミングや内容にも批判がある。15歳だった長女をいじめによる自殺で亡くした後、いじめ防止に取り組んでいるNPO法人「ジェントルハートプロジェクト」（川崎市）の小森美登里理事は、「アンケは少しでも早く、できれば3日以内に行うべきだ」と語る。遅くなるほど、生徒の記憶が曖昧になり、事実が脚色される恐れがあるからだという。

「女子生徒が亡くなった事実に関して何か知っていることはあるか」「気になる点があったか」というアンケの設問には、「ぼやっとしていて、明確に答えさせないようにする意図が感じられる」と小森氏。「被害者の実名を出し、『いじめについて知っていること、見たことを答えて下さい』とはっきり聞くべきだ」と指摘する。

いじめの可能性については、事故前に母親や女子生徒本人から計3度のサインが、学校側に発せられていた。事故後、いじめが存在するとした父親の3度の訴えの中には、生徒本人が「陰湿ないじめにあっていた」などと書き残したノートの存在も含まれている。

市教委も当初、アンケ結果の説明で、いじめに言及した生徒の数を当初は「多数」としていたが、後に「100人以上」と修正。学校の対応への批判が高まると、一転していじめを認めて謝罪した。ネットいじめなどに詳しい加納寛子・山形大准教授（情報教育）は「一連の対応を見ていて、そもそも『いじめはあってはならない』という雰囲気が、学校や市教委にあると感じた」と話す。

加納氏は「それでは教師も真剣にいじめと向き合おうとしない。いじめがあるクラスは『だめ』ではなく、発見したことを評価するシステムを作る必要がある」と提言している。

（この連載は、上田惇史、藤井亮、依田和彩が担当しました）

学校や教委などの動き

1月7日	女子生徒が山形新幹線にはねられ死亡。学校で緊急の全校集会が開かれる。市教委は記者会見で「いじめの報告はない」と説明。県教委にスクールカウンセラーの派遣を要請
8日	校長が全校集会で命の大切さを訴える
9日	市教委が臨時の校長会を開催。学校は緊急の保護者会を開いて事実関係を報告
13日	校長が女子生徒宅を訪問。父親から「いじめられていたのでは」と指摘を受ける
14日	遺族が全校集会で「真相究明のためアンケートに協力してほしい」と訴える
15日	女子生徒が残したノートに「いじめにあっていた」と書き込みがあったことを学校が確認。その後の会見で校長は「いじめはないと思っている」と発言。学校は全校生徒対象のアンケを実施
16日	アンケ結果を遺族に報告。「いじめの記載が多数あった」と市教委が会見で公表
17日	学校が教職員にアンケを実施。全校生徒との2者面談を開始
20日	吉村知事が会見で「もっと継続して親身になって寄り添う姿勢を持ってもらいたい。教育現場は今回の事案を重く受け止めてほしい」と苦言。市教委は市議会で学校の対応の不備を認め、「いじめを発見できなかったことが悔やまれる」と謝罪。アンケで100人以上がいじめに言及、13人が直接見聞きしていたことも明らかに。教職員アンケでいじめの記載はなかったが、不安な様子がみられたと複数が回答
30日	県教委がいじめ把握のための全県統一アンケの内容と教職員・保護者向けのチェックリストを公表
2月初旬	生徒から個別に聞き取り開始